

日韓で「非核・脱原発」を訴える 96歳の被爆医師

2013年4月9日
朝日新聞

ひと

日韓で「非核・脱原発」を訴える96歳の被爆医師

ひだ しゅんたろう
肥田 舜太郎 さん(96)

「核のエネルギーと人間は共存できない。核兵器をなくし、原発をひとつでもなくすることが、子や孫のために何よりも大事だ」

福島原発事故から2年。全国各地に招かれ、内科医として被爆者医療に生涯携わってきた体験をもとに160カ所以上で講演。評判は海を越えて伝わり、脱原発を目指す医師の会の招きで3月、初めて韓国を訪れた。数千人の被爆者が暮らす韓国は「ずっと気になっていた」。車いすで駆けつけ、市民集会や国会で信念を語った。

1945年8月6日は広島陸軍病院の軍医だった。直後から被爆者の治療を続けた。数日後、遠くから家族を捜しに来た人の中にも高熱や出血に苦しみ、紫斑が出て急死する人が現れた。歳月が流れても、外見は異常がないのに体のだるさを訴え続ける人がいた。

日本原水爆被害者団体協議会の中央相談所で長年理事長を務め、6千人超の被爆者に接し、体内に入った放射性物質が引き起こす「内部被曝」によるものだと確信した。「どの国の医師も放射性物質でどんな症状が出て、どう治療すればいいか全ては分からない。ならば根っこをなくすしかない」

被爆から68年。あの時に治療に奔走し、惨状を知る医師仲間はいない。「生き残っている医師として声をあげていきたい」。今夏で90歳になる妻のそばにずっといられないのが気がかりだが。

文・写真 中野晃

